

論 題

高校家庭科の住領域学習方法に関する研究
—住環境の授業開発と実践—

学籍番号 20718054

氏名 綿貫 里奈

指導者 薬袋 奈美子 専任講師

1、研究の背景と目的

生活主体形成者となり、住まいや住環境を選択する機会が迫っている高校生に対する住環境教育¹⁾が重要であると考え。本研究では高校家庭科における住環境教育の可能性と課題を検討することを目的とする。

2、研究方法

住環境教育の事例分析、高校家庭科教員らへのヒアリング²⁾を通して住環境教育の現状を把握し、新学習指導要領の住領域学習の分析を行う。その結果を踏まえて授業・教材を開発、実践し³⁾、授業の効果を検証する。

3、高校家庭科における住環境教育の現状

これまで高校家庭科における住環境教育の授業開発の研究として分校らによる、高等学校「住居領域」の教育内容・方法の検討⁴⁾や関川らによる、学校教育における住居領域の教材開発⁵⁾などが行われている。しかし、いずれの授業も「授業時間が長い」「テーマが限定的」という問題があり、授業時間の少ない高校家庭科の現状に適した授業の内容とはいえない。

また、高校家庭科教員へのヒアリング調査の結果、「知識提供は住居内部に関することが中心で住環境は扱っていない」「学習時間が少ない」ということが分かった。さらに「実践的・体験的な授業はなく講義型の授業のみ」という指摘があり、その背景として適切な教材が不足していることが挙げられた。高校家庭科における住環境教育の普及のためには新たに授業・教材の開発が必要であると考え。

4、新学習指導要領の住領域学習

新学習指導要領から教育課程の中で学ぶ住領域学習の内容を把握・整理する。住領域学習項目⁶⁾の割合は表-1に示す通り、教育課程の中で様々な科目で扱われていることが分かる。

小中高の新学習指導要領の全教科の内容のうち、住居領域項目に該当するものを抽出・分類⁷⁾したものを表-2に示す。大分類を見ると小中高を通して空間計画は算数科目、環境と構造は理科、経済と国土は社会科目で主に学ぶ。それ以外にも健康、住生活、意匠計画は小中高を通して学ぶ機会が多い。小分類を見ると小中高を通して数は算数科目、対話は国語、表現は美術科目で主に学ぶ。それ以外にも心身の健康は、小中高を通して学ぶ機会が多い。一方、制度やバリアフリーに該当する学習内容は見当たらなかった。ただし妹尾らの研究⁸⁾によると、バリアフリー等の記述がある高校家庭科教科書は多いとの指摘がある。

新学習指導要領に新たに追加された項目である住環境に関わる項目を見ると、住環境は様々な教科にわたって学ばれているが学習項目数は少ないことが分かる。家庭科は他教科での学びを統合する科目⁹⁾という位置づけを踏まえ、学習の不足を補う住環境教育プログラムを考える。

5、高校家庭科授業・教材の開発と実践

5・1、調査概要

学習時間が少ない高校家庭科の現状に対応させ、1回の授業で実施できるプログラム(表-3)を計画した。講義で住環境の知識を、ワークで知識を活用するスキルを、身につけることをねらいとした。

表-1 新学習指導要領における住領域学習項目

	小学校														中学校														高校													
	国	社	算	理	生	音	図	家	体	道	外	総	特	計	国	社	数	理	音	美	体	家	外	道	総	特	計	国	地	公	数	理	体	芸	外	家	情	計				
総数	50	39	145	74	9	57	24	20	98	56	6	1	14	593	44	45	75	70	30	19	97	49	58	24	1	27	539	37	74	18	76	199	59	145	29	48	29	719				
住教育関連項目数	50	29	108	30	9	0	24	8	6	55	2	0	0	321	44	22	6	15	0	18	7	20	0	24	0	0	156	29	24	14	7	16	8	48	0	35	0	181				
住環境教育関連割合(%)	100	74	74	40	100	0	100	40	6	98	33	0	0	54	100	48	8	21	0	94	7	40	0	100	0	0	29	78	32	77	9	8	13	33	0	73	0	25				

表-2 新学習指導要領における住領域学習の分類

大分類	空間計画		環境				福祉		健康		文化		住生活		安全		意匠計画		経済				合計															
	寸法	形	規模	数	熱	光	音	空気	水	電気	自然	高齢者	子育て	フリー	バリア	心身	社会	歴史	風土	家族	スタイル	ライフ		地域生活	防災	防犯	対話	表現	色彩	参加	産業	政治経済	構造	管理	公共	交通	国土	制度
小学校	項目数	3	17	17	73	3	3	0	3	2	10	15	2	0	0	35	3	3	7	8	6	6	3	3	2	51	19	5	1	7	1	3	1	3	3	9	0	321
	主教科	算		理	理	理	理	理	理	道	道	-	-	道	社	道	道	道	道	道	道	道	社	体	国	国	国	道	社	社	理	家	社	社	-			
中学校	項目数	0	4	2	0	3	1	1	1	0	3	11	0	4	0	13	8	2	4	3	5	2	2	4	1	44	21	3	1	3	3	2	1	0	2	4	0	156
	主教科	-	数	数	-	理	理	理	理	-	理	道	-	家	-	道	社	社	家	家	家	家	理	体	国	美	美	道	社	社	理	道	-	社	社	-		
高校	項目数	0	2	1	4	2	4	2	0	0	2	0	4	4	0	11	5	2	3	3	20	3	3	4	0	28	48	0	0	4	11	3	0	0	1	10	0	181
	主教科	-	数	数	数	理	理	理	-	理	-	家	家	-	体	公	地	地	家	家	家	家	理	-	国	芸	-	-	地	地	理	-	-	体	地	-		
合計	小分類	3	23	20	77	8	8	3	4	2	15	26	6	8	0	59	16	7	14	14	31	8	8	11	3	123	88	8	2	14	15	8	2	3	6	23	0	658
	大分類	123		66				14		75		21		53		14		221		29				8		2		3		6		23		0				

*網掛けのされた項目は、住環境に直接関連する項目を示している。

**高校は一部の授業が選択必修のため、1人の生徒が高校で学ぶ住領域学習項目数は表-2で示した値より少ない。

講義では新学習指導要領の中で不足しており、かつ住環境を考えるために必要な知識である制度に触れた。授業の効果を検証するため、授業前アンケートとふりかえりシートによる投げかけ(表-4)を実施した。

表-3 授業プログラム

授業の流れ	ねらい	知識	スキル
		知識の拡がり	主体的多面的な選択観
授業前アンケート	住環境に関心を持たせるきっかけ		
講義	住環境・公園に関する知識を学ぶ	○	
ワーク	個人ワーク	○	○
	グループワーク	○	○
授業のふりかえり	住環境への理解を深める 身の回りの住環境への関心を広げる	○	○

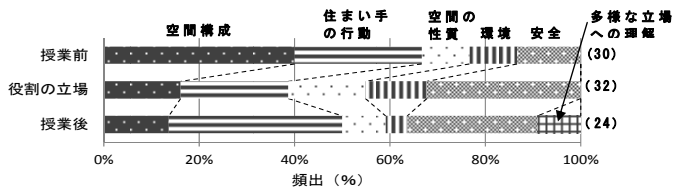
表-4 投げかけとその意図

投げかけ		投げかけの意図
授業前・役割*	①住みよいまちに大切なものは何?	住環境に対する知識の拡がりを見る
授業前後	②家の近くにある公園の良い点、悪い点は?	空間を判断する要素の変化をみる
授業後のみ	③グループで話し合った時、一番の話題は何?	グループでの話し合いの過程を知る
	④どこに公園をつくる?それはなぜ?	住環境を判断する要素をみる

*ワーク中の役割の立場になって回答してもらった。

5・2、授業による知識の検証

(1) 住みよいまちに対する意識の変化
投げかけ①に対する生徒の自由記述の回答について空間を判断する要素ごとに分類し¹⁰⁾、授業前・役割の立場・授業後で比較したものが図-1である。授業前はまちの空間構成や緑などまちのハード面に関する回答が高い割合を占めていたのに対し、授業後は住まい手の行動や安全などまちのソフト面に関する回答の割合が高まった。さらに授業前にはなかった多様な立場への理解を示す回答がみられるようになった。授業が生徒の住環境に対する知識の拡がりを促したと考えられる。



※()内は投げかけ①に対する生徒の回答総数を示す。

図-1 住みよいまちに対する意識の変化

(2) 空間を判断する要素の変化

投げかけ②に対する生徒の自由記述の回答から、空間を判断する要素が変化した生徒数と回答数の増加した生徒数を表-5で示す。特に公園の良い点について、判断要素の変化、回答数の増加がみられた生徒は約半数だった。生徒の回答を2人分について表-6で示す。生徒Aは空間を判断する要素が2つから4つ、回答数は2つから7つへと増加しており、授業による知識の拡がりがあった。また空間を判断する要素について授業後、新たな視点を得ている生徒は21人中9人いた。生徒Bは授業前後ともに悪い点として安全に対する懸念について記述しているが、授業後には公園があることによつてまちが安全になることに気が付いている。

表-5 投げかけ②に対する回答の生徒数

	判断要素が変化した生徒数	回答数が増えた生徒数	どちらもあてはまる生徒数
良い点	18	12	10
悪い点	13	6	5

※生徒21名中の回答生徒数を示している。

表-6 投げかけ②に対する生徒の回答の一部抜粋

生徒	良い点		悪い点	
	授業前	授業後	授業前	授業後
A	遊具が多い	高齢者の方も、小さい子どもも集まれる 広場と遊具の場所がつつじなどでしっかりと分けられている イチヨウや桜の木があり、季節を感じられる 人が集まるから安全な所	明かりが少なくて 夜は暗くて少し怖い	夜になると暗い所 車の通りが多い道に 面している所 トイレの電気がいつも消えていてつけられないところ
B	遊具がいっぱいある マンションが目の前にあるから住民同士の交流が出来る、友達ができる	住民同士のコミュニケーション 交流はかかれるところ 公園があることで人が集まり、防犯にも一役買ってくれる	せまい、走れない せまい所に遊具が多すぎて危ない 自転車でも入れるので、せまい中に自転車にのっている子供がいる	遊具が多すぎる 目の前が道路なので 空気が汚い 危ない

5・3、授業によるスキルの検証

投げかけ③と投げかけ④に対する生徒の自由記述の回答数を、項目ごとに分類したものを表-7に示す。グループでの一番の話題は約7割が安全だったにも関わらず、公園設置場所を選択する際にはあらゆる要素を考慮して検討している。周りの人の意見を参考にしながら主体的に住環境を選択するスキルを身につけたと考えられる。さらに21人中14人の生徒が与えられた役割の立場だけでなく、まちや多様な立場の人に配慮して公園の設置場所を検討していた。授業によって住環境について多面的な観点から捉えるスキルを身につけたことが分かる。

表-7 投げかけ③、④に対する生徒の回答数

	空間構成	住まい手の行動	空間の性質	環境	安全	多様な立場への理解
③	1	2	2	0	14	2
④	11	2	3	2	3	8

6、まとめ

子どもが教育課程で住環境について学ぶ機会が少ない。住環境教育が特に必要だと考える高校家庭科では、教材の不足を背景として住環境を扱っていないことが分かった。しかし開発した授業・教材の実践の結果、高校生に対して知識や自ら考えさせる機会を提供すれば、十分に住環境に関する知識とそれを活用するスキルが身につくということが確かめられた。今後は高校家庭科という限られた学習時間の中で、授業がどれほど活用してもらえるかが課題である。住環境教育の普及のために、さらに授業・教材を発展させる必要がある。

参考文献

- 1) 分校淑子、綿引伴子、山岸雅子：高等学校「住居領域」の教育内容・方法の検討(第1報) - 研究の枠組みと授業案の作成 - 日本家庭科教育学会、40・2、63~69、(1997)
- 2) 関川千尋、黒光貴峰：学校教育における住居領域の教材開発(II) コンピューターを使った住み方シミュレーション教材の有効性の検討 日本家庭科教育学会誌、48・4、308-318、(2006)
- 3) 志賀英ら：住居学、朝倉書店、第1版(1988)
- 4) 三船康道+まちづくりコラボレーション：まちづくりキーワード事典、学芸出版社、第1版(1997)
- 5) 妹尾理子：住環境リテラシーを育む、萌文社(2006)
- 6) 大学家庭科教育研究会：市民が育つ家庭科、ドメス出版(2004)

注)

- 1) 本論では住環境教育を「住まいの地域環境を主体的に形成することのできる人材育成を目指した教育」と位置付ける。
- 2) 住環境教育の現状を把握するために9月初旬、日本女子大学家政学部住居学科の平田准教授、高校家庭科の現状を把握するために9月中旬、日本女子大学附属高校の家庭科教員中村先生にヒアリング調査を行った。
- 3) 11月中旬、千葉県立東葛飾高校で生徒21名(男子8名、女子13名)に「住みよいまちとは」というテーマで授業を実施した。
- 4) 参考文献1)に授業時間数の検討が指摘されている。
- 5) 参考文献2)より教材が限定的であるという指摘ができる。
- 6) 参考文献3)、4)から住に関するキーワードを抽出した。
- 7) 高校は一部の授業が選択必修のため、1人の生徒が高校で学ぶ住居領域学習項目数は表-1で示した値より少ない。
- 8) 参考文献5)で、高等学校家庭科「家庭総合」教科書住居生活分野における持続可能性に関する記述の研究がなされている。
- 9) 参考文献6)で、『家庭科の目的は、家庭生活等に関する既習の学校知や子どもたちの生活知、日常知を前提にして、ジェンダー・フリーの視点で発達段階にふさわしい家庭生活等に関する基礎的な知識や技能を身につけ、将来の生活主体者にふさわしい生活の科学的認識やライフスキルの基本を培うことである』という指摘がなされている。
- 10) 生徒の回答から傾向ごとに6つのキーワード(まちの空間構成、住まい手の行動、空間の性質、環境、安全、多様な立場への理解)を抽出して分類した。